NPO
中帰連平和記念館
CHUKIREN HEIWAKINENKAN

「15周年記念集会」報告

記念館は昨年11月21日（日）ウエスタ川越で『15周年集会』を開催し、130名余が参加下さいました。「倉敷、長野、群馬、茨城、神奈川・・・」など遠方からもご参加下さり有り難う御座いました。

また非会員の皆さんの参加が会員の2倍もあり、参加者カードから「友人から聞いて」など来館者や中帰連・記念館を知っている方からの広がりの傾向があり感謝致します。

集会は松村髙夫理事長の主催者挨拶に続き、芹沢昇雄事務局長からこの15年間の「記念館の歩み」がパワーポイントの写真を視ながら説明があり、続いて細川清和理事から記念館も参加し世界各地で3年に1回開かれる、「国際平和博物館会議」など海外との交流の報告がありました。

次に中帰連の証言映像『泥にまみれた靴で』(25分）が紹介されました。続いて、「A4-11頁」のレジュメも配られ、笠原十九司さん（都留文科大学名誉教授）の『現在の中国とわれわれの運動の課題』と題した1時間余りの講演がありました。

会場には元中帰連・福岡支部会員で美術教師だった檜山高雄さん(1988年68歳で逝去)が戦場体験を描き遺した油絵や、中帰連関連の新聞記事も展示して、休憩時間などに見て頂きました。

目　　次

・「15周年記念集会」報告 ・・・・・・・・1
・「東アジア
　近現代史セミナー」来館 ・・・・2
・「中国・新華社通信」取材・・・・・・3
・広大・中村教授来館 ・・・・・・・・・・3
・「再生の大地合唱団」
　　10周年公演 ・・・・・・・・・・3
・「記念館資料室から」・・・・・・・・・・4
・「一枚の写真」・・・・・・・・・・・・・・・・5
・「桧山さんの油絵」・・・・・・・・・・・・5
・「平頂山事件」・・・・・・・・・・・・・・・・6
・「蔵書紹介」・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
・橋本勝さんの風刺マンガ ・・・・・・6

第2部は星野泰久理事の司会で笠原さんも入り、パネラーとして石川求（都立大学教授）、小島一博（中帰連ご遺族）、藤原麗子（記念館会員）、山本潤子（大阪大学大学院）5名の皆さんによる「パネルディスカッション」に移り、各自から発言があり質疑応答も含め90分余りの議論がありました。

会場からパネラーの小島さんに、自らの加害証言をしてきた「お父さんをどう思いますか？」との質問に、小島さんの「誇りに思います」との返事に、会場から拍手が沸き4時間ほどの集会は終了しました。

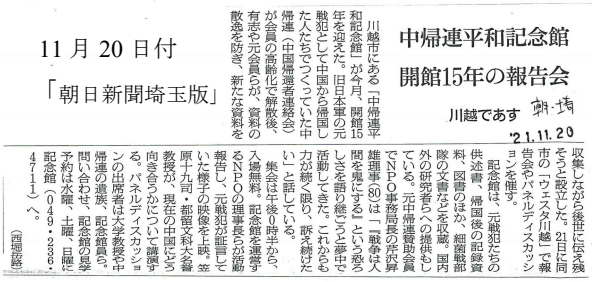
記念館の年間来館者は多くはありませんが、国内外の研究者やジャーナリトも来館し「英語、ドイツ語、ハングル」などで中帰連を紹介する本も書いて下さり寄贈されています。

この狭い土地と中古のプレハブ小屋を当時の「中帰連」の皆さんが買って下さらなかったら、この運動は出来ませんでした。

また、記念館はこの15年間一切の公的補助を受けず、全国のご理解ご支援下さる皆様の「会費とカンパ」のみに支えられ運営出来たことに、改めて心から御礼と感謝申し上げます。

私たちスタッフも全員ボランティアで活動しており、「20周年」に向けて此からも宜しくお願い致します。

11月20日付
「朝日新聞埼玉版」



中帰連平和記念館
開館15年の報告会

川越であす　朝・埼
'21.11.20

川越市にある「中帰連平和記念館」が今月、開館15年を迎えた。旧日本軍の元戦犯として中国から帰国した人たちでつくっていた中帰連（中国帰還者連絡会）が会員の高齢化で解散後、有志や元会員らが、資料の散逸を防ぎ、新たな資料を収集しながら後世に伝え残そうと設立した。21日に同市の「ウェスタ川越」で報告会やパネルディスカッションを催す。

記念館は、元戦犯たちの供述書、帰国後の記録資料、図書のほか、細菌戦部隊の文書などを収蔵。国内外の研究者らへの提供もしている。元中帰連賛助会員でNPO事務局長の芹沢昇雄理事(80)は「『戦争は人間を鬼にする』という恐ろしさを語り継ごうと夢中で活動してきた。これからも力が続く限り、訴え続けたい」と話している。

集会は午後0時半から、入場無料。記念館を運営するNPOの理事長らが活動報告し、元戦犯が証言していた様子の映像を上映。笠原十九司・都留文科大名誉教授が、現在の中国にどう向き合うかについて講演する。パネルディスカッションの出席者は大学教授や中帰連の遺族、記念館員ら。問い合わせ、記念館の見学予約は水曜、土曜、日曜に記念館（049・236・4711）へ。（西堀浩路）

'21.11.23 赤旗

加害の歴史 伝え継ぐ
中国帰還者の記念館15周年

平和憲法を守り、再び戦争の加害者にならないという決意を込めた「NPO中帰連平和記念館」15周年集会が21日、埼玉県川越市で行われました。

同記念館は「中国帰還者連絡会（中帰連）の資料を記録・保存し、日中戦争での加害の歴史を後世に伝えるため2006年、川越市内につくられました。

中国帰還者連絡会　日中戦争に参加し、捕虜・戦犯となった969人が1990年、中国の撫順戦犯管理所に送られました。そこで人道的な生活を送るなかで加害の罪を認めて反省し、謝罪。中国から釈放されて日本に帰還した人たちが57年につくった会。会員は、自らが行った加害の事実を証言し、反戦平和、日中友好のために活動してきました。2002年、会員高齢化のため解散。

理事長の松村高夫さん（慶応大学名誉教授）は「中帰連の人たちは侵略戦争での自身の責任を感じて、きちんと反省し、日本に帰って反戦平和の活動を続けてきました。私たちはその精神を受け継

2021年（令和3年）12月6日（月曜日）　埼玉

加害の歴史 伝え残す

ひと物語

中帰連平和記念館事務局長　芹沢　昇雄さん

（「しんぶん赤旗」）（「東京新聞・埼玉版」）

「東アジア近現代史セミナー」来館

都内練馬区で毎月学習会（講演会）など開いている「東アジア近現代史セミナー」の皆さんがマイクロバスで来館しました。今回2回目の来館でした。

説明や映像を視た後、質疑応答や全員が一言ずつ感想を話し、2時間ほど滞在して下さいました。

その後、車で30分ほどの「原爆の図・丸木美術館」へ向かわれました。

「中国・新華社通信」来館取材

記念館の「15 周年集会」にも取材に来た中国の新華社通信・東京支局が、今年の「日中国交正常化 50 年」を記念した番組制作のために、「記念館の活動を紹介したい」と 12 月 22 日に、二人の記者が取材に来ました。

当日は 10 時から 15 時過ぎまで館内取材や芹沢事務局長からの説明の後、事務長がインタビューを受け、ほぼ一日がかりの取材でした。

（鈔文記者、芹沢事務局長、郭丹記者）

広大･中村教授来館

広島大学の中村平教授（大学院人間社会科学研究科）が冬休みで帰省し、埼玉在住のお母さんと妹さんを同伴し暮れの 29 日に来館下さいました。

過日、著書の**『植民地暴力の記憶と日本人－台湾高地先住民と脱植民の運動』**の寄贈を受けています。

中村さんは既に中帰連はよく存じで昼前に来館され 16 時過ぎまで在館されました。

（中村教授とご家族）

「再生の大地合唱団」10周年公演

記念館とも友好関係にある「再生の大地合唱団」の 10 周年公演が都内の「小金井宮地ホール」で開催され 400 人余りが参加しました。

最初に佐藤康尚副団長挨拶があり、続いて「再生の大地」合唱団 10 年の歩みの映像が流れました。その後、10 周年記念講演として山田朗さん（明治大学教授）から、「戦争犯罪と戦争責任を考える：帝銀事件で明らかになったこと」と題する講演がありました。

休憩を挟んで 12 部構成の「合唱朗読構成『再生の大地』一撫順戦犯管理所一」（作・構成：大門高子、作曲：安藤由布樹）の合唱があり、その中で中帰連が踊っていた「蒙古踊り」も披露されました。

終章では「紫金草合唱団」など友好合唱団も合流し、安藤由布樹さんが車椅子で指揮を執り大合唱でした。最後に合唱団団長の姫田光義さん（中央大学名誉教授）の挨拶で終了しました。

連載　記念館資料室から
第27回　地方支部を訪問して得られた教訓

石田隆至（「中帰連に学ぶ会」事務局）

『前へ前へ』17号は、1959年5月20日の発行です。

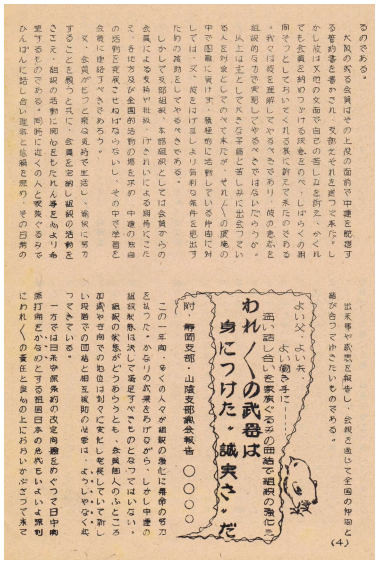
前号では、帰国後の生活の一応の安定が、一部の地方で組織活動の停滞を招いていることを受け、活発な取り組みが行われている支部の様子が紹介されていました。そこで、本部は**「支部の総会にはできる限り参加する方針をたて」**、**「静岡、長野、大阪、山陰、山口、広島の各支部は早くから旅費の半額から全額実費を負担して本部に総会参加を要請」**しました。**「このような本部、支部の努力によって、静岡、長野には五十嵐常任理事、大阪、山陰、山口、広島には約一ヶ月にわたって国友理事長の出張参加が実現」**しました。

今号の内容の半分以上がその報告に充てられています。巻頭の長文記事は、本部理事長の国友俊太郎による**「関西、中国各支部を訪問しての教訓」**です。都市部の大阪と同時に、地方の山陰や山口なども訪れて、その多様性にどう向き合うかが課題になっています。

「我々は一つの中連という組織に加入し、共通の願望をもってはいるが、会員個人個人の生活、仕事、環境は大変異なっており、左は労組の活動家から右は警察、検事に到るまで、あるいは貧困な労働者、農民から資本家までを含んでいる。このことは注目せねばならぬ事実であり、また、一つの特色でもある。このことは同じ願望をもっていても同じように動くことも話すこともできないし、単純に表面の姿だけで仲間を評価してはならないことを教えている」。

多様性の中にある共通性も見出されています。**「しかし一方では、どの地区へ行っても誰に会ってもすぐ分かることは」**、**「労組活動家であろうと、封建的関係に圧迫されていて連絡を断っている仲間であろうと、やはり同じくらい〔中帰連に誇りと〕関心をもっているという事実である。私たちは『連絡がないから』『会費が長くとだえたから』『会から抜けたいと言っているから』『反対派とつき合っているから』等々の理由で仲間を疑い非難し、一人でも失ってはならない」**。この点は、まもなく会費未納会員の「整理」が議論されることを思えば、示唆的です。

地方支部には、**「その日の仕事をすませて夜の11時から強風の中を数時間の山道をテクテク歩いて汽車に乗り、翌日の総会にかけつけた」**会員、**「妻子を病床に残して参加し、終わるとすぐに病院に帰ってゆく仲間」**もいて、**「総会に出席するためにはその前後三日間仕事を休み、従ってその間の収入は零になるばかりか、交通費、宿泊費、会費がかかるというような」**、東京とは異なる環境を目の当たりにしました。それでも、**「参加者の誰かれは例外なく、来てよかったと喜んで帰っていった」**一方で、**「そうしてそこに問題が残った」**と指摘されている点が目を引きます。**「障害や犠牲を乗り越えて結集した人、あるいは結集できる人はまだいいのである。必要なことは集まられない人、集まらない人をどうするかである。いってみれば、こういう人にこそ中連は呼びかけたいからだ。山陰では総会参加の費用を軽減するために、一様に徴集した**


われ〳〵の武器は身につけた・誠実さ・だ

附・静岡支部・山陰支部・山口支部・広島支部会報告　〇〇〇〇

この一年間、多くの人々が組織の強化に尊い努力を払ってきたことかと思いやられます。しかし中帰連の組織状態は決して満足すべきものとは言ってはいない。組織状態がどうあろうとも、会員個人のふところ事情や生活の問題は別ものであり、会費は会員にとって新しい現実での問題として相互扶助の必要は、ますますいやなく共通である。

一方では日本労働組合の改定問題をめぐって日中両国打開などが、なかなかとすると組織日本の見代もいよいよ緊切にわれ〳〵の責任と負担の上にのしかかってきている。

（4）

出来事や歴史的組合し、会費を通じて全国の仲間と結び合うてゆきたいものである。

総会会費からかかった費用を各人ごとに分配した。長野では、次の総会を目指して総会費用の分割積立を決定した」。一人も取りこぼさないという強い思いが、本部・支部で共有されていることが分かります。

それは、自分たちには「**中国人民の大きな期待が寄せられている**」ため、「**組織の維持ができないで解散するようなことがあれば、我々は日本人としての民族的良心も人間としての誇りをも投げすてることになる**」と考えられていたからです。「**そう考えると組織の維持、会費の納入は決して単純な経済的問題（略）ではない**」とまで認識されています。だからこそ、「**誠実さ**」と「**相互援助**」が武器だという教訓も導かれているのですが、この点は山陰支部総会に参加した宮崎敏夫の感想文に譲ります。

「**県総会には私も初めて会社を休んで9日の朝9時鉱山を出発、10日朝9時出雲に着きました。会場には本部より国友さんが来ており、国さんの顔を見、手をにぎったきり、本部健在なりと知り、涙がとめどもなく流れて国さんの顔がぼっとかすんでしまいました。こんな嬉しいことはない。国さんは最初にお母さんは元気かねと聞かれた。本部の皆さんは我々の家庭の事をいつも忘れず思っていてくれ、心配されていることを知り、泣けてしようがなかった。関君もいた。難波君もいた。支部長の曽田君もいた。皆泣いて手をにぎり合った。会社を休んで総会に出席したその甲斐があった。出て来て本当によかった**」。

一 枚 の 写 真

戦犯・中帰連の 1062 人は 56 年の「特別軍事法廷」で起訴された 45 人には死刑も無期なく、しかも、シベリアの 5 年と管理所の 6 年の計 11 年が刑期に参入されました。

起訴以外の全員は「起訴免除」の決定を受け管理所に戻ると、何と中庭に「パーティー」の席が用意がしてあり、机の上にはビールや食べも物が用意してありました。

そして収監当時は敵対していた職員の皆さんが出迎え、手を握り肩を抱き「良かったですね！」と自分のことのように喜んでくれました。「鬼から人間に戻った」彼らと職員は、そこまで「信頼関係」が築けたのです。

彼らは「鬼から人間」に戻してもらったと感謝し、その堅い意思は変わりませんでした。

桧山高雄さんの「油絵」②

（中帰連・福岡支部、元美術教師）

（1944 年 7 月
湖北省当陽県陽紫益門外）

「 平 頂 山 事 件 」

遼寧省の「撫順戦犯管理所」に近い「撫順炭坑」は、昔から露天掘りで有名ですが、戦時中この炭坑は日本に接収されていました。1932 年 9 月 15 日この炭坑が抗日ゲリラに奇襲され 11 名の死傷者が出ました。

翌日、関東軍はこの平頂山集落がゲリラと通じていたと解釈し、「写真を撮る」と欺し崖下の一カ所に全員を集めました。

しかし、三脚の黒い布を取るとカメラではなく、一斉に回りから機関銃が火を噴き 3000 人余りが虐殺されました。

更に生存者は銃剣で刺し殺され（生存者が数人居ました）、その後、崖をダイナマイトで爆破し埋めたのです。

戦後、中国政府がその遺骨の一部を掘り起こし、「平頂山惨案記念館」として保存しています。中国国内の強制労働の犠牲者を含め、この様な場所を「万人坑」（人捨て場）といい中国各地にあります。

蔵　書　紹　介

初版本は右翼の妨害で廃刊になり、その後に再刊されました。何れも「中帰連」の編集で彼らの証言が載っています。

中国側が日本軍の行動を表現した「三光」（焼き尽くし、奪い尽くし、殺し尽くし）の言葉が、この本で知られるようになりました。

（左：初版本 57 年 3 月発行
中：82 年 8 月　発行、右：84 年 5 月発行）

橋本勝さんの「風刺マンガ」

（「森友問題」を無かったこと
「０」にしてはならい！）

『NPO 中帰連平和記念館』
〒 350-1175 埼玉県川越市笠幡 1948-6
TEL&FAX：０４９－２３６－４７１１
E-mail：npo-kinenkan@nifty.com
ＨＰ：http://npo-chuukiren.jimdo.com/
ＭＬ：npo-kinenkan@freeml.com
郵便振込口座名「NPO 中帰連平和記念館」
振込口座　：００１５０－６－３１５９１８
開館日：「水、土、日」（10:30 ～ 16:30）
（ご来館はなるべく事前にご連絡下さい）